

●海で泳ぎイモを洗う

串間市市木の「幸島」には、イモを洗って食べたり、海で泳いだりすることで世界的に知られる文化猿が生息する。「日本の渚百選」に選ばれた石波海岸と、「石波樹林」(国天然記念物)の沖合約三百メートルにあり、周囲約四^キの自然豊かな島だ。

一九三四(昭和九)年、国の天然記念物に指定された幸島の猿は現在、約百匹余り。猿の生態の研究を五十三年にわたって続けてきた三戸サツエさん(八)は、猿社会に家柄やルールがあることを発見。エピソードを交えて次のように語っている。

「猿の系図づくりは一匹ずつ顔を覚える数取りから始まる根気の要る作業。今は研究所(京都大学霊長類研究所)の職員が後を引き継ぎ、すでに半世紀にわたる猿の系図が出来上がっています。猿には人間と変わらない社会のルールが

あり、家柄とか順位もあるのです」

雌猿には雌頭がいて、雌と子どもは家柄によって順位が決まっている。雌は家柄があつて家族があるから威張っているという。

雄の方は、これに反して家族がなく単独行動。だから上位の猿がやってくると下位の雄猿は黙って席を譲る。また順位も決まっている。これは無用な争いごとを避けるためのルールと、三戸さんは分析している。

ボスになると、彼が行くところほかの猿が席を譲り、餌は自由に食べられる。初代はカミナリ、二代目セムシ、三代ナベ、四代ゲシ、五代ノソ、六代ケムシと続き、現在は七代目のホタテ。猿の平均寿命は三十一歳前後。中には二十八年間もボスの座にいた猿もいる。三戸さんは

「今のボスが交代したのは最近。交代しても争い事はしない。穏やかで、死ぬまでがボスの役目。

交代の時期があるとなれば、話し合いでしようか」と笑う。

幸島には弁財天を祭る神社がある。村人たちは昔から猿のことを「和子さま」と呼び、「弁財天」の使いとしてあがめてきた。猿と人間の温かい関係は今も続いている。

餌は、もっぱら季節のもの。木の葉や木の実、ツバキの花のみつも吸う。最近では魚や肉も食べるようになり、猿の食生活も時代とともに変化してきている。人間が食べるようなものは何でも食べるという。

幸島は人間が手を加えず、猿たちが自由に生きることのできる貴重な島であり、いつまでも守り続けたい。

三又 喬



幸島の猿。そこには家柄や生きるためのルールもある